

# 周年放牧生産子牛の生時体重及びサツマゲイト内での吸乳期における発育に及ぼす要因

松山 義弘

## 目 的

入来牧場では周年放牧方式による子牛生産を行っている。その場合、一般農家の子牛に比較して生時体重が小さく、その後の発育も劣る傾向がみられる。本調査では本学牧場産牛の生時体重やサツマゲイト内での吸乳期における発育に及ぼす諸要因を明らかにしようとした。

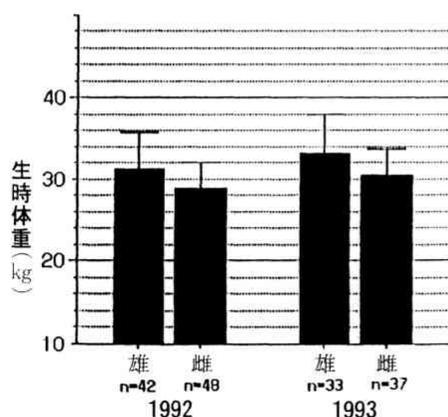
## 材料と方法

1992年～1993年までの周年放牧生産子牛雄75頭及び雌85頭の生時体重を測定し、生まれてから1週間後にサツマゲイト内に移動し、離乳日齢（60日～70日）までの間の1日当たりの増体量（DG）を調査した。

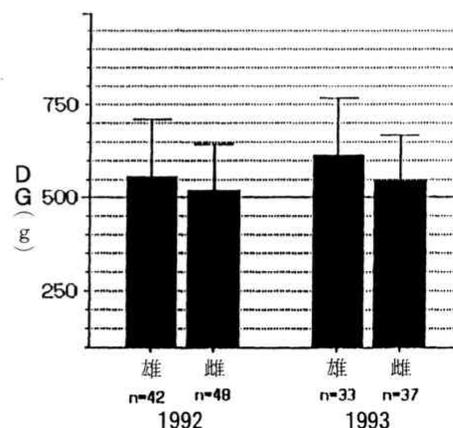
## 結 果

周年放牧子牛の生時体重は、92年度より93年度が雄、雌とも大きくなった（第1図）。吸乳期の1日当たりDGは、92年度に比較し93年度が雄、雌とも大きくなる傾向を示した（第2図）。子牛の生時体重は、春生まれが大きく、冬生まれは小さい傾向を示した（第3図）。吸乳期におけるDGは、雄は夏に低い値を示し、春、秋では高い値を示した。雌では冬が高い値を示し、春、夏、秋では低い値を示した（第4図）。産歴と生時体重の関係は、雌に明確な傾向は認められなかったが、雄では5～6産目に大きい傾向を示した（第5図）。吸乳期における産歴とDGの関係は、雄では、5～6産目が高く、7産目より低くなる傾向を示したが、雌では一定の傾向は認められなかった（第6図）。生時体重と吸乳期における増体量との関係は、雄雌とも一定の傾向は認められなかった。

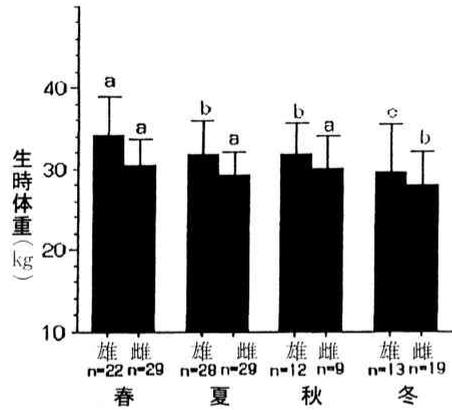
以上のことから冬季放牧等で、分娩前の栄養状態を改善することで生時体重を大きくすることが出来るものと推察された。また、夏秋の増体量低下に対しては、暑熱対策が必要であると思われた。



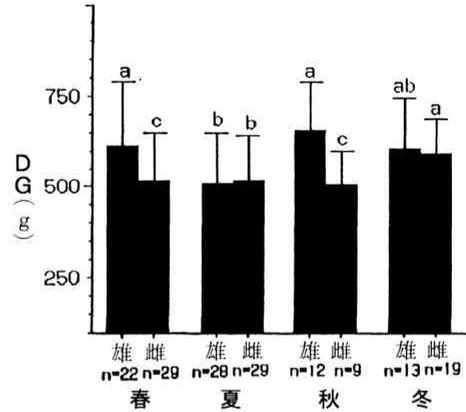
第1図 周年放牧による子牛の年度による生時体重の違い。



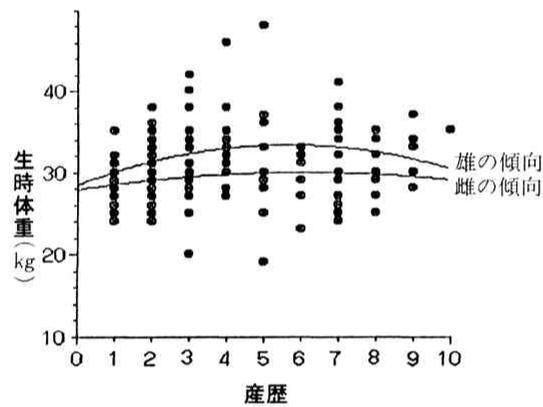
第2図 周年放牧生産子牛の吸乳期の年度によるDG(g)の違い。



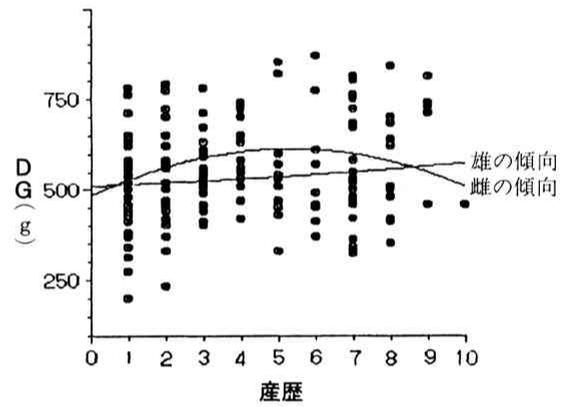
第3図 周年放牧生産子牛の季節による生時体重の違い。



第4図 周年放牧生産子牛の吸乳期における季節による日増体重(DG)の違い。



第5図 周年放牧生産子牛の産歴と生時体重の関係。  
● 雄 ◎ 雌



第6図 周年放牧生産子牛の吸乳期における産歴と1日当たり増体量(DG)の関係。  
● 雄 ◎ 雌